

2. 四国における「アルト・ハイデルベルク」

依岡隆児

1 はじめに

各地の旧制高校の同窓会誌などでは、旧制高校出身者たちが母校を「アルト・ハイデルベルク」と呼んでいるのをよく見かける。もとになった戯曲『アルト・ハイデルベルク』は皇太子と旅館の娘の恋の物語である。しかも大学が舞台であり、そもそも「高校」の話でもない。それにもかかわらず当時の高校生たちはこれに感情移入し、わが青春でもあるかのように懐かしんでいる。文学史上からは消えていっても、この作品は日本では旧制高校出身者たちの間で、時代の雰囲気伝えるシンボルとして長く残っていたのである。

青春時代を哀惜するという思いがこめられているようだが、ではなぜこのドイツの戯曲がこれほどまでに各地の旧制高校生たちの心をとらえたのか。「アルト・ハイデルベルク」は旧制高校時代の何かを表す代名詞となっていたようだが、いったい彼らはこの作品に何をしていたのだろうか。

「アルト・ハイデルベルク」の日本での受容については、劇場上演の記録や翻訳史がほとんどである。そんななか生松敬三の『ハイデルベルク』は、日本の旧制高校・大学でのこの作品の受容について言及している。¹ 自らも一高生・東京帝大生としてハイデルベルク現象を体験した彼は、この「ハイデルベルク」は日本人の憧れだったとしている。また岩崎昶は「新ハイデルベルク」で、東京帝国大学における「ハイデルベルク」神話について触れ、「これは日本では特別の大学であった。手っ取り早くいえば、すべての高等学校や大学生のあこがれの大学であった。『アルト・ハイデルベルク』（『思ひ出』とも訳されていた）という芝居のせいである」²として、「ハイデルベルク」が当時の高校生や大学生の憧れの大学で特別な存在だったが、そのようになった理由は『アルト・ハイデルベルク』という芝居のせいであるとしている。本国ドイツとは20年近くの時差で上演されたので時代の好みに合ったため、この作品は「日本の創作劇みたいに身近な受け止められ方」がなされ、「ハイデルベルク」は自分たちには「青春のふるさと」となったのだとしている。³ 論文では、松本俊樹が宝塚での「アルト・ハイデルベルク」受容を論じて、旧制高校生、帝大進学者たちにはこの戯曲は、単なる外国戯曲以上のものだったとしている。⁴

このように旧制高校での人気について触れている文献もあるが、従来のこの「アルト・

¹ 生松敬三『ハイデルベルク～ある大学の精神史』TBSブリタニカ、1980年

² 岩崎昶「新ハイデルベルク—旧友再会」『映画が若かったとき』平凡社、1980年、228頁

³ 同書、229頁

⁴ 松本俊樹『センチメンタリズム』から『朗らか』—堀正旗の『アルト・ハイデルベルク』受容と宝塚—『演劇学論叢』2015.3、第14号

「ハイデルベルク」受容研究では新劇でのレパートリーとしての研究か東京の高校・大学での受容に焦点が当てられていて、それらがどのように地域で受容され土着化したかについては十分には解明されていない。⁵ 東京、もしくはせいぜいで関西圏での受容が中心であり、その他の地域においてこの作品がどのように紹介され、どのような受け止め方をされ、どんな影響を及ぼしたかについては、十分に明らかにされていない。演劇として上演されるのをいち早く見ることができた大都市圏とは異なり、外国の新しい文化に触れる機会が少なかった地方では、どのようにこの作品は広まり土着化できたのだろうか。

そこでここでは、戦前の日本各地に「ハイデルベルク」を伝えたドイツ人と彼等が直接感化を及ぼした地方の旧制高校に注目しながら、外からの視点から日本における青春の成立を明らかにすることを目的とする。本論は、青春が外来文化の影響から作られた伝統であったこと、そしてそれが大都市中心というより地方に土着していったところに文化の影響と変容の新しい側面があることを明らかにするだろう。とくに第二次世界大戦前の、国際化や都市文化とは一見無縁とされる地域において、外国からの影響があり、それが土着化していたことの証拠ともなれば、この報告は今後、地域文化のあり方を考察する際に新しい見方を提供することとなるにちがいない。

2 「アルト・ハイデルベルク」についてと日本での受容

2.1 「アルト・ハイデルベルク」とは

この戯曲はドイツのマイヤー・フェルスター作（1901年）で、もともとは小説『カール・ハインリヒ』（1899年）という小説だったものを、後に戯曲化したものだ。舞台で人気が出て、やがてドイツのベルリン劇場でアルフレート・ハルムの演出によって上演され、ロングランとなった。

皇太子の大学生活とそれへの愛惜を描き、「メロドラマ」と言われることもしばしばだ。だが当時の学生生活が描かれている点では、貴重である。エリートの「青春」とそれとの別れを描き、ハイデルベルクが主人公の第二の「ふるさと」になったという設定も影響し、この作品は激動の時代を生きた当時の若者の心のよりどころとなったのである。だが、芝居となり映画化がなされ一種のブームともなったが、ドイツ本国では表現主義や社会主義リアリズムの時代を迎え、この作品は旧時代ののどかな物語として、やがて忘れられていった

ドイツ南西部に位置するハイデルベルクは、ネッカー川のほとりにある美しい町で、ドイツ最古の大学であるハイデルベルク大学でも有名だ。新カント派の牙城であり、その名声ゆえに丸亀周造や三木清ら、日本からも多くの留学生がやってきた。その憧れがこの演劇の人気に一役買っていたのは間違いない。

大学町を舞台とした⁵幕もののこの戯曲では、ザクセン＝カールスブルク公国という架空

⁵ 拙著「旧制高校から見た青春概念の形成」『国際研究集会報告』第44号、国際日本文化研究センター、2013年、pp.327-342

の国の皇太子カール・ハインリヒがハイデルベルク大学に1年の予定で留学する。ユットナー博士という教育係が随行するが、彼はかつてハイデルベルクで学生時代を過ごしたことがあった。

「博士（低く）いいかね、あのハイデルベルクは——きみにはわかるまい。きみには、あれがなにを意味するか、まったくわかっていない。あれは、そう、シャンペンを飲むようなものだ——いやちがう、ばかばかしい、シャンペンどころか、バーデンのワイン、五月（マイ）ワイン、それに加えて女の子たちとばかさわぎの学生を足したようなものなんだよ（後略）」⁶

こう、皇太子にハイデルベルクが意味するものを説いていた。シャンペンを飲むようなものだ、いやそれだけではないワインも女の子もバカ騒ぎの学生も足したようなものだとしているが、要するに、それは青春とでもいうものだといわんばかりである。やがて皇太子は大学では「ザクソニア」という学生団に入り、コンパや踊り、歌の日々を送ることになる。皇太子カールはやがて旅館の女将の姪ケーティと恋仲になる。しかしその矢先、叔父の王が病気に倒れ、カール・ハインリヒはわずか4カ月でハイデルベルクを後にする。再会を期して旅立つも、ほどなく王位を継ぎ、結婚も決められてしまう。2年経ち、青春の日々がたまらなく懐かしくなった彼は、婚礼直前、ついにハイデルベルクを再訪する。

皇太子の学生時代の思い出を友情と淡い恋を織り交ぜて描いた、ロマンチックでほろ苦い一篇のドラマである。しかし他方、この作品は日本では、全国各地にできた旧制高等学校でドイツ語テキストに使われ、戦後も長く同窓会で懐かしまれる作品となった。コンパや学生団やお決まりのラブロマンスで、高等学校の蛮カラな気風を作りあげるのに大いに与った。と同時に、やがて激動の時代で生きることとなる日本の青年たちは、この劇をわがこととして受けとめてもいたのだ。高校という青春の場を得て、つかの間はめはずし、友情とロマンスを育みつつも、もう二度と戻れぬ日々を胸にしまって、彼らはその後の人生を生きていかざるをえなかった。「懐かしのハイデルベルク」はかつて日本のあちこちに存在していたのである。

2.2 日本での受容

次に、この作品の日本での受容の概略を述べる。まず文芸協会が1913年（大正2年）に有楽座で上演したが、これは松居松葉が英訳から重訳したもので、「思い出」という題にしている。松井須磨子がケーティを演じた。築地小劇場も、1924年に田村秋子をケーティにして上演している。土方与志演出で、カール・ハインリヒを友田恭助が、ユットナー博士を青山杉作がそれぞれ演じ、その後も2度、公演している。

この戯曲はまた映画化されている。直接演劇で見ることのできなかつた地方の人びとは映画によってこの作品に触れることになっただろう。邦題を「思い出」（1923年、ウーファ

⁶ マイヤー＝フェルスター『アルト＝ハイデルベルク』、岩波文庫、1988年、26頁

社)として日本でも上映された。トイトニア映画協会配給で、ハンス・ベイレンが監督・脚色し、エーファ・マイがケーティ、バウル・ハルトマンがカール・ハインリヒ、ヴェルナー・クラウスがユットナー博士を、それぞれ演じた。また、アメリカでは1927年にエルンスト・ルビッチ監督で映画化(The Student Prince in Old Heidelberg)されたばかりか、1954年にはアメリカでリチャード・ソープ監督でも映画化されている。またオペレッタに改作された「学生王子 The Student Prince」が1924年に上演された。なお、英語圏での受容では、1936年にニューヨークのマクミラン社からコロンビア大学のドイツ語教師オットー・P.シンネラーが初級学生用に書き換えて出版している。日本でもこれは『アルト・ハイデルベルク物語』として翻訳出版され、1938年以來、戦後にいたってもなお版を重ねた。また1930年にはドイツの劇団が来日し、京都で「アルト・ハイデルベルク」を上演している。

戦後は、宝塚歌劇団のレパートリーとなったり、大衆雑誌や子向け学習雑誌に1960年代までは青春もの・恋愛ものとしてとりあげられたりした。しかし、そこでは大学の学生生活や風俗を描くというよりは、王子と庶民の娘のラブロマンスが中心となり、定番メロドラマと化していたのである。

3 四国における「アルト・ハイデルベルク」

では、この「アルト・ハイデルベルク」は地方においてはどのように受け入れられていたのだろうか。東京など大都市における受容が新劇のレパートリーとして西洋演劇の話題作として上演され、そこからの影響がもっぱらであったとすれば、地方においてはまたそれとは違った受容が見られたのである。そこで以下、この作品の四国における受容のされ方から、地方におけるこの作品の受容をみていく。

3.1 板東収容所での上演

「アルト・ハイデルベルク」は、第一次世界大戦のときのドイツ人捕虜を収容していた板東俘虜収容所でも1918年に上演されている。言うまでもなく、男の役者がケーティを演じている。上演に際してのポスターも残っている。⁸

収容所内の新聞『ディ・バラッケ』の第3巻第4号(通巻57号)1918年10月27日号⁹にはこの上演についての報告が出ている。「ヴィルヘルム・マイヤ＝フェルスターの『アルト・ハイデルベルク』18年10月23日、24、26-28日の上演について」という記事には、こうある。

「『アルト・ハイデルベルク』は、思想的な面から見ればかなり皮相な筋立てではあるが、独特の魔力があり、われわれは何度もその呪縛にとらわれてしまう。生きる喜びにあふれて、なんの心配もない幸福の時を享受し、生きることが明るく照り輝く、うららかな庭そ

⁷ 松本、前掲書

⁸ 『鳴門市ドイツ館所蔵資料図録』(「板東俘虜収容所関係資料」イベントプログラム編)鳴門市、2018年、77頁。

⁹ 鳴門市史料研究会『ディ・バラッケ』の第3巻第4号(通巻57号)、鳴門市、2005年

のものという青春、その青春という魔法だ。『アルト・ハイデルベルク』は、『世界がどうであろうと、俺たちは幸せで、それをしっかり抱きしめている。楽しい若者の暮らしなのだ』と心が歓喜して叫ぶ、青春時代を描いて見せている。——しばしば過度にセンチメンタルな個所があるものの、学生生活のすばらしさが温かく、新鮮な息吹きで目と心の前で描き出されるのを見て、心がはずまない人がいようか。ケーティの言うように『美しい青春時代は短い』こと、そして通り過ぎてしまえば、どんな意志を持ってしても青春のみが知るそのような楽しさを、1時間たりとも取り戻せないことが激烈に表現されたこの作品を喜ばない人はいない。¹⁰

この作品が当時のドイツ人にとって「青春」という「魔法」を表現するものとして独特の魅力があったことがわかる。また「故郷を思わせるものを見せながら」というコメントからはこの作品が捕虜の身で異国に過ごすわが身を振り返るよすがとなっていたことがうかがえる。「われわれだって、青春の多くを奪われ、カール・ハインリヒのよう」だったと、主役の皇太子に自らをだぶらせて見ていた捕虜たちの姿が浮かんでくる。ここでは、祖国ドイツが「アルト・ハイデルベルク」に重ねられている。

『アルト・ハイデルベルク』がまさに俘虜収容所で好んで演じられ、観客を集めるのも分かりすぎるほどである¹¹とあるように、当時におけるこの作品の人気ぶりがうかがえる。「さまざまに変化する情景が、故郷を思わせるものを見せながら展開するのを見ると、心の琴線が1本ならず共鳴するのだ¹²」と述べられていて、ドイツ人捕虜たちにとって「故郷を思わせるもの」がこの作品では表現されていたことが知れる。ヴェーゲナー海兵がカール・ハインツを「極めてすばらし」く演じ¹³、「ケーティ」役はカウム二等海砲兵で、「われわれに生身のドイツの娘を目の当たりにしているような幻想を与えること¹⁴」ができたという。

3.2 松山高校での受容

1919年創立の旧制松山高校にも「アルト・ハイデルベルク」はあった。

「こまどりのケティたち」(松山高校同窓会『真善美』¹⁵)という同窓会誌の連載がある。題名に「ケティ」とあるが、これはもちろん「アルト・ハイデルベルク」の登場人物の旅館の娘の名前である。

「こまどり」という名を聞いただけで、そこで飲んだカルピスやコーヒーの味とともに、我等のハイデルベルク伊予の松山で過ごした三歳の青春を、甘酸っぱくあるいはホロ苦く思い出す旧松高生は数多いことだろう。アルト・ハイデルベルクには、ケティがいなけれ

¹⁰ 同書、55頁

¹¹ 同書

¹² 同書

¹³ 同書、56頁

¹⁴ 同書、57頁

¹⁵ 山下敏雄、古谷綱博、秦敦「こまどりのケティ」、松山高校同窓会編『真善美』、1984年。

ばならない。「こまどり」のケティは時代とともに交替した。¹⁶

と、松山を「ハイデルベルク」、そしてそこで青春を過ごした皇太子が高校生たち、そしてそのマドンナである「ケティ」が「こまどり」という喫茶店の女性たちとされていたのである。彼らが高校時代を振り返る際に、「アルト・ハイデルベルク」に自分たちの青春を投影していたことがわかるだろう。昭和5年2月に開店、初代はマダムの岩田カヲルであり、彼女は「松高生」のアイドルになった。

「ハイデルベルクに帰って見たけれど、ケティにはもはや逢うすべもなかった皇太子カール・ハインリッヒの嘆きを、わが松高生たちは幸いにも味わわなくてもすむ」。¹⁷

このように、松山高校の学生たちは自らを「アルト・ハイデルベルク」の主人公の皇太子カール・ハインリヒに重ねて見ていた。ただ卒業後そこに帰ってみると、芝居とは違って、いまでも「こまどり」があった点で、「アルト・ハイデルベルク」の悲哀を味わわなくてもすんだという。とはいえ、原作ではカール・ハインリヒはハイデルベルクに帰ってきて、一度だけケティに再会している。

「こまどり」は、女主人はやがて代替わりしたが、存続していく。ロシア人との混血アケミが舞い込む。桜井忠温が勉強部屋に使ったという2階の屋根裏部屋に住ませたこのアケミが「こまどり」を昼は喫茶、夜はカフェーにして切り盛りするようになる。¹⁸ しながら、そんな彼女も後に蒸発してしまう。こうした歴史を持つ喫茶店は、松山の高校生たちにとっては、東の学校といえば松高、西の学校と言えば「こまどり」¹⁹ とされたほど、愛されたのである。

「こまどり」は「我等のハイデルベルク」と称されていて、大街道一丁目にあったという。²⁰ 初代「ケティ」は、松山高校の学生たちについて、こう回想している、「松高の方には本当に可愛がっていただきました。お蔭で道も開けました。松高の方がたに恥ずかしくないものをお出ししたいという努力が、店の発展につながったと思っております。手を合わせたい気持ちです」。²¹ 松山高生たちの存在のおかげで自分たちの発展につながったと述べている。高等学校生たちが松山の人たちにとってどのような存在だったかが知れる。

また初代の由比校長が大家族主義を唱え、「高等学校は良い成績を取るために来る所ではない、良い友人を作る所」と論じた²² というが、これは「アルト・ハイデルベルク」でユットナー博士が「やれ学習計画書だの、やれ厳格にして規律ある御勉学だの。あのハイデルベルクで、遊興にあらずしてひとえに学問修業だど。ひとりでやってくれたまえ、カール・ハインツ、わたしはやらんぞ、こんりんざいやらんぞ」²³ と、ハイデルベルクという

¹⁶ 同書、389頁

¹⁷ 同書

¹⁸ 同書、394頁

¹⁹ 同書、396頁

²⁰ 同書、309頁

²¹ 同書、511頁

²² 週刊朝日編『青春風土記 旧制高校物語1』朝日新聞社、1978年、266頁

²³ マイヤー＝フェルスター、前掲書、25頁

場所の意義を愛弟子の皇太子に説くセリフを彷彿させる。こうした校風を受け継ぎ、弊衣破帽の学生が全国から集まり旧制高校はストームやコンパなどの特有の文化でのどかな地方都市にカルチャーショックを与えた一方で、町の人たちにとっては、高校はわが町の誇りとなったのである。

また、同窓会誌には、「青春のメロディ」として阿部貞雄（21回文甲）が、アルト・ハイデルベルク風の歌を、以下のように記している。

「卒業の時のアルバムにアルトハイデルベルクの少女が皇太子に捧げた詩を拙いながらも
じって私は次のように書いた

いざ来たりませ松山に
されど去ります日もあらば
忘れ給うな若き日の
持田の町のまなびやの
幸多き日の思い出を」。²⁴

ここからは、「青春」のメロディとして「アルト・ハイデルベルク」が念頭にあったことがわかる。松山の町がハイデルベルクであり、青春の思い出の地となっていたことが歌われている。

こうした青春のイメージは、松山高校の日本人教師たちが軍国主義の時代にあっても、ヘッセやゲーテの青春小説について好んで語っていたことも影響している。²² 回生理二の沢田允明は、法制経済の先生がシュトルムやヘッセ、シラー、ゲーテ、シュティフターを授業で話していたと回想している。その先生は、「シュトルムやヘッセなんかを読んでいると自分のようになるぞ」と、文学好きの自分を諭したことを懐かしく思い出している。²⁵

ちなみに、この地が青春の地であったという思いは松山高校に赴任したドイツ人講師にも共有されていたろう。たとえば、戦時下に赴任していたベルナーは、ドイツに帰国しても松山高校の教え子たちと交流していた。その彼が80歳になってから卒業生に寄越した手紙には、「松山の時代は以前よりも生き生きと甦るようになりました。それは私にとって精神的で美的な文化の体験であって、それは私たちの文化とは異なるやり方で成立し、展開したものでした」と書かれている。²⁶ ベルナーは松山でドイツ文化とは異なる文化や精神性に触れたことを懐かしみ、いまドイツにいても日本についてのドイツ語、英語の本を読むことを喜びとしていると述べている。この同窓会誌『真善美』にはまた、ベルナーの写真が3枚掲載されている（「会食時のベルナー先生」、「ベルナー先生の授業」、「お嬢様と海で」）²⁷ が、このうち「ベルナー先生の授業」では、日独「バンザイ」と書かれ国旗のイラストが描かれている黒板を背にスーツにネクタイ姿の彼が写っていて、日独同盟下のドイツ人が置かれた側面が知れる。一方で、「お嬢様と海で」には、海で3、4歳くらいの二人

²⁴ 『真善美』前掲書、362頁

²⁵ 同書、366頁

²⁶ 同書、33頁

²⁷ 同書、346頁

の娘と映っている短パン姿のベルナーが写っている。その笑顔は松山での生活が平和であり、青春を満喫するものだったことを物語っている。

3.3 高知高校での受容

旧制高知高等学校の方はどうだったろうか。ここでは大正から昭和に同校に外国人講師として赴任していた、ふたりのドイツ人を取り上げてみよう。

四国には旧制高等学校が松山と高知にあった。そこでは英・独語の第一外国語別に甲・乙類に分けられていて、ネイティブの教師が雇われていた。旧制高知高等学校は文科に甲類が一組と二組、乙類が一組。理科は甲類、乙類にそれぞれ一組ずつあった。²⁸

旧制高知高等学校の二代目ドイツ語講師ゴットロープ・ボーナー（ボーネル）(Gottlob Bohner, 1888-1963)については、拙著「旧制高等学校ドイツ人講師の見た四国」(『言語文化研究』Vol.19, 2011)で紹介したが、ここでは「アルト・ハイデルベルク」との関連で取り上げる。彼はインフレのドイツから1925年に来日し、1928年まで高知高等学校でドイツ語講師として勤務した。妻とまだ小さな息子を連れていた。この息子ハインリヒは戦後、1983年に高知を再訪している。

時代は、江部初代校長の薫陶がなお強く作用していた昭和初期であり、ボーナーが去ってから左翼の取り締まりが始まる。その点でも彼の高知滞在は恵まれていた。彼は第一次世界大戦時には将校で、高知に赴任したときすでに38歳だった。ドイツ語の歌を歌い、生徒たちからは「好々爺」と親しまれた。また彼は寮歌にドイツ語訳を付けたことでも知られている。親日家で、帰国後は教育行政に従事し、高官となった。²⁹ ドイツ国立図書館の検索によると、1988年1月23日にマンハイムに生まれてから、シュパイアーで育ち、そのギムナジウムを出ている。その後、エアランゲン、ミュンヘン、ベルリンの大学を経て、1909年にハイデルベルク大で学位を取っている。中世ドイツ文学（パルツィファル）を専門としていた。³⁰

彼が高知について書いた日本紀行と滞在記の二冊のうち、『東アジアへ～復興の兆しのもとで』では、写真や絵葉書も載せられている。高知高等学校での写真もある。その写真の中の一枚は、ボーナーの高等学校での授業風景である。キャプションに、映画「アルト・ハイデルベルク」の解説をしているところ、と出ている。黒板には「Alt-Heidelberg」の文字が見え、写真入り冊子が立てかけられている。この映画は彼の母校の「ハイデルベルク」大学を舞台にした戯曲が原作であるため、彼にはこの映画への思い入れがあったことが推測される。

では、なぜこの時この映画が紹介されたのだろうか。この映画（ドイツ映画、ウーファ社、1923年）は「思い出」という題で高知高等学校開校式（1925年11月3日）を記念して

²⁸ 『自由を空に～旧制高知高等学校外史』南溟会・旧制高知高等学校同窓会、1982年、85-86頁。

²⁹ 同書、474頁。

³⁰ バイエルン国立図書館(BSB)における「Gottlob Bohner」のファイルによる。

高知市内の堀詰座で上映されたものであった。³¹ この年の 4 月にボーナーは赴任しているので、この映画の上映には彼の意向も働いていたのかもしれない。ゴットロープがハイデルベルク大出身であり、この大学を舞台にした戯曲が映画化され、それを異国の町で見ることになったのは、単なる偶然なのだろうか。彼が「ハイデルベルク」に込めた思いは郷愁であり、母校への誇りであり、青春のかけがえのなさだただろう。そうした思いがこの高校の学生たちに熱く語られていたことが想像できる。後に高知高校でこの作品を舞台化しようという計画ももちあがったのもそのためかもしれない。ボーナーが「ハイデルベルク」普及に一役買ったことは、想像に難くない。

この映画上映は高知高校の映画研究会が企画したものだった。高校の創立記念日のために欧州映画鑑賞会と銘打って、「キーン」（フランス映画、1922 年）との二本立てで上映した。映画館である堀詰座を貸切りにして、市民に無料開放したこともあり、大盛況だったという。

旧制高知高等学校同窓会誌『南溟』創刊号の海路昌臣「部史『映画研究会』に寄せる」によると、第 1 回映画鑑賞会が大正 14 年秋に開催され、上映されたのは「思い出」（アルト・ハイデルベルク）とデンマーク映画「あるじ」（1925 年）だった。「思い出」は東京でも大いに好評で、作品は「通俗性」のあるものだったとされる。部員の海路らが東京に行き、中央映画社と交渉した。徳川夢声門下の福地悟朗とともに夢声本人に会い、山形天洋を弁士に推薦してもらった³²というように、上映にはかなりの力の入れようだった。

地方においては、この作品が映画という新しいメディアを通して受容され、広まっていったことがわかるだろう。その際に、当時あちこちにできていた高等学校がこの作品の普及に一役買っていたことも想像できる。

ゴットロープ・ボーナーのエッセイ『東アジアへ』は、ドイツを船で出発して 1925 年 4 月にこの高知に赴任するまでの彼の旅行記であるが、そこでは高知と高等学校の最初の印象がこうつぶられている。

「学校はまだ二年前にできたばかりで、たくさんの校舎があった。（中略）すべてが新しく、洒落ていた。校舎や運動場の周りにも、木が植えられていた。たいていは松や桜だ。なんと美しいことか！一本の道がこのキャンパスの中央入口側に沿って延び、狭くはあるが舗装された車道が——もちろん左右には側溝があった——別の側を回っていった。全体的に見ると、ちょっとした大学といった風情だった。日本にはまだなんとかいくつかの大学があるだけ（少なくともこの語のドイツ的意味においては）なので、高等学校、すなわち *Vorhochschulen* はそのぶん価値があった。その三年間のコースはだいたい我々の大学の第一学年に相当している。高等学校に入ることは学生の卵たちにとっては自由な生活の始まりだったし、日本の都市はこうした学芸の殿堂を有することをおそらく誇りに思ってい

³¹ 『自由の空に 旧制高知高等学校学校外史』、前掲書、81 頁

³² 旧制高知高等学校同窓会『南溟』創刊号、1974 年、28 頁

たことだろう。ちょうどドイツの都市が自分ところの大学を誇りに思っているように」。³³

高等学校の建物や敷地について詳しく述べていて、当時の校舎の様子がよくわかる。現存する白黒写真ではわからないペンキの色まで記している。宿舎の家は城山公園の近くの一階屋だった。学校は二年前（1923年）にできたばかりで、すべてが真新しい。地方都市で高等学校を持つということは当時、町の人々には誇りだったが、それはドイツの町が大学を持つことを誇りにしているのと同様だとしている。この点において彼は高知に対して親近感を抱いている。この故郷への思いのシンボルとなったのが旧制高校だったとすれば、ボナーが学生たちに紹介した「アルト・ハイデルベルク」にその思いは投影されていたはずである。

・エーバースマイヤーとハイデルベルク

同じ旧制高知高校のドイツ講師で、戦争が近づく時期に六代目となったのがベルント・エーバースマイヤー（Bernd Eversmeyer, 1906-1998）である。彼にも高知高校の回想があるが、そこにも「アルト・ハイデルベルク」の痕跡がうかがわれる。高知時代のエーバースマイヤーについては拙論「旧制高知高等学校ドイツ人講師・エーバースマイヤー」（『創生研究プロジェクト「異文化に照らし出された四国～外国語文献の調査・研究より～」報告書』（2018年）で詳しく触れているが、ここではハイデルベルクとの関連でのみ言及する。

彼は、ヴェストファーレン州ビーレフェルト生まれで、1939年から1941年まで、DAA D（ドイツ学術交流会）派遣で、旧制高知高等学校ドイツ語教師を務めた後、1941年から1945年まで京都の独逸文化研究所所長だった。戦後一時帰国したが、1957年から1965年まで再来日、東京独逸学園校長を務めた。帰国後、1971年からボッフム大東亜科学研究室で日本学を専攻した。

高知時代の回想として二つのエッセイを、ボッフム大学紀要『ボッフム年鑑』に発表している。そのうちの同誌第七巻（1984年）に掲載のエッセイは、高知高校での当時のドイツ人講師の仕事や高校の生活を報告しているが、そこで生徒たちから「わが心、ハイデルベルクに失い」を歌ってくれと言われたエピソードなどを紹介している。ここからは「ハイデルベルク」が戦時下の高知高校にも受け継がれていたことがわかる。教室でのこのエピソードは、次のように紹介されている。

「授業では黒板に生徒からの匿名の要望、特に音楽方面での要望が書かれた。『どうか「わが心、ハイデルベルクに失い」を歌ってください』といったことが黒板に要望として書かれた。ついでに『その愛はハイデルベルクでは今日どうなっていますか』という問いも」。

34

³³ Gottlob Bohner: Nach Ostasien im Zeichnen des Wiederaufstiegs. Birkfeld=Rahe 1931., S. 100 f.

³⁴ Bernd Eversmeyer: Deutsche Kulturtätigkeit in Japan 1939-45. Persönliche Erinnerungen. In: Bochumer Jahrbuch zur Ostasienforschung. Bd.7. 1984, S.357.

当時のドイツ語授業の様子が知れる。黒板に学生からの要望が書かれることがあったのだが、あるとき「わが心、ハイデルベルクに失い」を歌ってほしいと書かれていたという。「ハイデルベルク」へのこうした愛着には、高校でずっと人気だった「アルト・ハイデルベルク」の演劇の影響もあったはずである。「わが心、ハイデルベルクに失い」は1923年の流行歌で、ミュージカル化され、さらに戦後には映画化された。学生たちはさらに、その愛は今日のハイデルベルクではどうなっているかと質問もしている。高校で「ハイデルベルク」が伝説化して、遠い憧れとなっていたことがうかがえる。ドイツ人講師との交流もこの「ハイデルベルク」が合言葉のようになっていたのだろう。歌を歌ってくれと要求したのは、ゴットロープ・ボーナーやその他のドイツ人講師が授業中によく歌を披露していたということを同窓会誌で回想されているが、そうした伝統を学生たちは知っていて、エーバースマイアーにもそれを求めたためだろう。

彼の方にも、家族とともに2年間を過ごした四国・高知への愛着がうかがえる。高知についての回想をいくつも残し、当地を懐かしみ、日本人の教え子たちとの交流を生涯たやすことがなかった。1987年に旧制高知高等学校創立六十五周年記念祭に招かれ、彼は戦後一度高知に「里帰り」している。

この高知高校と「アルト・ハイデルベルク」の関係についてはさらに、戦後に高知高等学校の生徒たちによって上演の計画がなされたことがある。だがケーティ役をカフェの女給にしようとしたところ、反対にあって取りやめになっている。また高知高校出身の三浦朱門は後に「アルト・ハイデルベルク」という小説を『小説 宝石』(9(9)、1976-9)に発表している。舞台を現代の会社に移した通俗的な短篇であるが、彼にとって「ハイデルベルク」という言葉が何を意味していたかが知れるだろう。

以上のように、旧制高知高校と「アルト・ハイデルベルク」とに深い関わりがあったことは明らかだろう。ゴットロープ・ボーナーやエーバースマイアーにとっては、高校のみならずこの地が第二の「アルト・ハイデルベルク」となっていたに違いない。青春と淡い恋の物語ばかりでなく大学町への郷愁もそこにあった。一方、映画上映とこうしたドイツ人講師の影響もあって、この演劇に当時の日本の地方で青春を送る高校生たちは感情移入していたのである。

おわりに

本稿では、四国という一地方における「アルト・ハイデルベルク」の受容をみてきたが、この作品が土着化し、青春のシンボルとし、そこの地方都市を第二の故郷としていたことが明らかになったことだろう。異国が舞台の通俗的な作品を通して一つの時代と一地域が浮き彫りにされたのではないだろうか。

板東俘虜収容所で「アルト・ハイデルベルク」がドイツ人捕虜たちによって上演され、旧制高校では、松山高校で「我等のハイデルベルク伊予の松山」とされ、高知高校でも「あの有名なアルト・ハイデルベルクのように」(『南溟』)と戦時中に一昔前の高校を振り返る

ときに使われ、ドイツ人講師のエッセイの中にもそれが記録されていた。徳島でも松山、高知でも、そこは「アルト・ハイデルベルク」としてイメージされてきたのである。

なおこの作品は戦後も日本に生き続ける。貴公子と町娘のロマンスとして、宝塚で上演され、大人向けのロマンス、そしてまた子供向け雑誌の読み物として翻案されていく。日本の青春ものの定番となり、やがてその痕跡も見えないくらい日本の精神風土に順化していったのであるが、その後の「アルト・ハイデルベルク」については、またの機会に取り上げたいと思う。

参考文献

- 荒井訓「終戦前滞日ドイツ人の体験（４）—『終戦前滞日ドイツ人メモワール聞き取り調査』—」、『文化論集』第20号、2002年3月
- 井上純一「三人のボーネル兄弟の日本—牧師館の子 Hermann Bohner (2)—」、『「青山戦ドイツ兵俘虜収容所」研究』、青山ドイツ兵俘虜収容所研究会（鳴門市ドイツ館）、2009年7月
- 岩崎昶『映画が若かったとき』平凡社、1980年
- 上田浩二・荒井訓『戦時下日本のドイツ人たち』集英社、2003年
- 生松敬三『ハイデルベルク～ある大学の精神史』TBSブリタニカ、1980年
- 旧制高等学校資料保存会『白線帽の青春』国書刊行会、1988年
- 旧制高等学校資料保存会『旧制高等学校全書』（全9巻）山星書店、1985年
- 旧制高知高等学校同窓会『自由を空に～旧制高知高等学校外史』南溟会・旧制高知高等学校同窓会、1982年
- 旧制高知高等学校同窓会『会員名簿』第24号、2002年
- 旧制高知高等学校50年史『高知、高知、あゝ我母校』旧制高知高等学校同窓会、1972年
- 『高知新聞』1983年4月18日（「ボーナーさん（旧高知高ドイツ人教官の長男）近く来高」）
- 『高知新聞』1983年4月27日（「ボーナー氏（旧高知高ボ博士の子息）55年ぶり来高」）
- 『ディ・バラック』第3巻第4号（通巻57号）、鳴門市ドイツ館、2005年
- 南溟会『南溟』1974年～
- ノーベル書房編集部編『ああ青春デ・カン・ショ』ノーベル書房、1968年
- 秦郁彦『旧制高校物語』文藝春秋、2005年
- 『ヘルマン・ボーネル先生生誕百年記念展展示会パンフレット』大阪外国語大学ドイツ語学科研究室、1984年
- マイア・フェルスタア、三浦吉兵衛訳『アルト・ハイデルベルク』郁文堂、1937年
- マイヤー＝フェルスター、丸山匠訳『アルト＝ハイデルベルク』、岩波書店（文庫）、1988年
- 松山高校同窓会『真善美』、1984年

八波直則『私の慕南歌—回想と随筆』雄津書房、1981年

大和啓祐「ふたりのボーナーさん」、『鶏肋大和啓祐教授退官記念集』、高知大学人文学部
独文研究室編、1992年

山本一哉企画制作『わが青春・旧制高校』ノーベル書房、1968年

和田洋一編『アルト・ハイデルベルク物語』(Otto P. Schinnerer: Geschichte von Alt-Heidelberg
6. verbesserte Auflage) 白水社、2002年

Gottlob Bohner: Nach Ostasien im Zeichnen des Wiederaufstiegs. Birkfeld=Rahe 1931.

Gottlob Bohner: Ein Jahr in Japan. Köln 1942 (1930).

Franziska Ehmke und Peter Pantzer (Hg.): Gelebte Zeitgeschichte: Alltag von Deutschen in
Japan 1923-1947. München 2000.

Mayer-Förster, Wilhelm: Alt-Heidelberg: Schauspiel in fünf Aufzügen. Ikubundo 1925